



あっ！と驚く アセタケの観察会

松本妙子（東邦大学）

10月21日に風土記の丘で行われた観察会は、雨が降る中で行われた。いつもなら見付け次第キノコを採集してしまう私だが、今回はアセタケ属の専門家である小林孝人先生を講師に迎えての観察会だったので、アセタケ属を中心に探索した。しかし、アセタケ属が数個で、他も大して採集できず残念な結果だった。一方、カゴ一杯採集されている方もおられ、また約50人ほどの参加者のもと、多種多様なキノコが採集された。

採集は午前に行われ、お昼をはさみ午後は参加者が採集してきたキノコに名前を付けていく作業になる。が、アセタケ属の多くは、目立った外部形態をもたないこともあり、名前が付けづらいグループの一つであろう。

私事になるが、卒業研究で調査しているフィールドにもアセタケ属が多く出現している。アセタケ属は、外見が似ても同じ種でないことが

多々あり、顕微鏡での胞子やシスチジアの観察が必要不可欠となる。顕微鏡観察の際には倍率を1000倍で見ているが、それでも、ある種の胞子やシスチジアの外部形態の特徴を見いだすのに四苦八苦している。顕微鏡で名前を付けようとしてもかなり大変な作業であると思う。

今回はアセタケ属に名前を付けるだけでなく、参加者が胞子やシスチジアを顕微鏡で観察し、小林孝人先生が解説をいれて名前を付けていかれた。その際私は先生が指定されたアセタケ属のプレパラート作りをしていたが、そこでビックリしてしまった。先生は、外見でおおよその見当をつけ顕微鏡で確認し、倍率が400倍で、さっさかさっかと名前を付けておられたのだ。見るポイントが違うらしい。今度お会いするときには、どこに注目し、アセタケ属の何に惹かれたのか、ゆっくりお話を伺いたいものである。

今回採集されたアセタケ属の約半数に、名前が付けられた。名前が付いたアセタケ属は以下の通りである。

シロトマヤタケ、コバヤシアセタケ、オオキヌハダトマヤタケ、シラゲアセタケ、シロニセトマヤタケ、コブアセタケ、ミナカタトマヤタケの7種である。